

—追悼—

捷雄の思い出

ハロルド・ジリン*

1971年に末元善三郎教授は、自分の学生で田中捷雄という将来性のある若者がいるので、私のところへよこしたいという手紙をくれました。彼、田中捷雄はリサーチフェローとしてパサデナのカリフォルニア工科大学を訪れ、1971年7月から1973年3月まで私たちと一緒に仕事をしました。私はすぐに、末元教授の推薦が的を得たものであることを知りました。彼は俊才であるだけでなく、エネルギーでいつも新しいアイデアに満ちていました。私たちはすぐに、よい研究仲間になりました。できるだけ高い分解能で太陽表面の構造を観測することが太陽活動の研究の鍵であるというのが、私たちの共通の認識でした。そして彼は私以上のエネルギーと熱意とで、このテーマを詳しく、注意深く研究して行きました。彼が週末や夜遅くまで、映写室で黒点の写っているフィルムを解析しているのを私はたびたび見かけたものです。彼はまた、フィルムに写っている太陽のH α 画像の複雑な模様を正確にスケッチする芸術的才能のようなものを持っていました。これらのデータを元に、中川好成教授（現・千葉工大）とフォースフリー磁場の理論的研究にまでも手を延ばしました。

彼の興味は太陽の活動現象だけに限られていたわけではありません。A. バットナガー博士（現・ウダイプール天文台）と行った、H α 線による彩層の振動現象の研究は今でもその重要性を失っていません。彼はまた、スピキュールを高分解能で観測すると、しばしば二重に見えることを初めて見いだしました。しかしながら彼には日本で重要な仕事がかまっており、パサデナを去る日がやって来ました。彼の帰国が私には残念でなりませんでした。

その後彼は1975、1977、1986年にも客員研究員としてカリフォルニアを訪れ、私と多くの仕事を共同で行い、論文も何編か出版しました。この期間中、私たちは常に連絡を取り合い、共通の問題について研究しました。日本で会うときも、カリフォルニアで会うときも、同じ共通の話題について語り、自分たちの成果を確認し、他の人たちにそれをいかに伝えるかを考えました。太陽を写した映画を一緒に見ている時が、特に幸せな時間でした。私と妻と、彼の一家（夫人と2人のお嬢さん）の間には、形式的な遠慮はとっくになくなり、家族ぐ

るみの付き合いが始まっていました。彼と私は、研究仲間であるだけでなく、良き友人同士でした。彼は私の巡り会った、最もすばらしい人間の一人です。

「ひのとり」衛星計画の中核に彼をすえたのが誰の考えか私は知りませんが、これは的確な判断でした。彼は観測装置を熟知しているだけでなく、どういう科学研究をなすべきかを理解していたからです。プロジェクトが成功裡に終わると、ほっとして一息つくのはよくあることですが、彼は間髪を入れずにデータの解析にとりかかりました。自分のプロジェクトがもたらす結果を待ちきれなかったのでしょう。彼のアイデアを生かした観測装置、見事な観測結果、それにもとづく理論、どれをとっても賞賛に値するものでした。

彼が自分が白血病であることを知った時も、彼は研究者としてこれに立ち向かいました。太陽フレアの光度曲線を描くかのように、彼は自分の血液の中の白血球の数をプロットして行きました。新しい処方を試す度にそこに矢印を書き込み、白血球数が一時的に減り、無慈悲にもまた増加して行くのを何度も見たのでした。彼は医者への宣告より3倍近くも長く生きました。

昨年のクリスマスの前に、彼は私に長い手紙をくれました。その中には、彼の病状、いま書いている論文のこと、書きたいと思っている論文の計画が語られていました。彼は最後の最後まで研究をしていました。彼が亡くなった翌日、私は彼、田中捷雄の手書きの手紙を受け取りました。それは別世界からのメッセージのように思えます。それには完成した論文の原稿が同封されていました。私は今その原稿を編集し終わり、ビッグベア天文台のプレプリントとして印刷に廻し、Solar Physics誌に投稿しました。しかしもう今後は、私たちは彼の仕事を見ることはないのです。この悲しさは例えようもありません。

(訳: 桜井 隆)

☆

☆

☆

☆

☆

☆

* カリフォルニア工科大学ビッグベア天文台長 Harold Zirrin, Director, Big Bear Solar Observatory, California Institute of Technology: Memories of Katsuo.